

朝日選書

170



野口武彦

「悪」と江戸文学

野口武彦 著

「悪」と江戸文学

朝日選書 170

野口武彦<のぐち・たけひこ>

1937年東京生まれ。早稲田
大学第一文学部卒業。現在
神戸大学文学部助教授。

〔主著書〕

『石川淳論』（筑摩書房）

『谷崎潤一郎論』（中央公論社）

『徳川光圀』（朝日新聞社）

「悪」と江戸文学

朝日選書 170

1980年11月20日 第1刷発行

定価 780円

著 者 野 口 武 彦

発 行 者 藤 田 雄 三

印 刷 所 共同印刷株式会社

発 行 所 朝 日 新 聞 社



☎104 東京都中央区築地5-3-2 電話03(545)0131(代)
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京 0-1730

© T. Noguchi 1980/装幀・多田進 0395-259270-0042

写真提供

早稲田大学
坪内博士
記念演劇博物館

目次

はじめに

弑逆者の悲劇——明智光秀の文学的造型

大盜賊の伝説——権力竊攘の挫折者たち

「悪」と晦冥——『東海道四谷怪談』の世界

白浪物の世界——黙阿弥劇をめぐって

毒婦物の系譜

172 136 76 44 9 5

「悪」と江戸文学

はじめに

「悪」の起源は、おそらく人類の発生と同じくらいに古いだろう。もしも「悪」にそれ自体の有史以前と以後があるとしたら、それは一にかかつて、人間のしかじかの行為が「悪」なるものであると見なされる意識の成立に依存していたにちがいない。人間の始祖の「原罪」の物語を持ち出すまでもなく、およそいかなる文化、いかなる民族にも、その最古の文学に「悪」の痕跡が記されていないものはないのである。

日本文学の場合も、もちろんその例外ではありえない。すでに『古事記』には「天津罪」にふれたスサノオノミコトの追放が記されているし、奈良時代の正史は反逆と陰謀の記録に事欠かない。はなやかな宮廷文化にいろどられた平安社会は、一皮むくなら、盗人と殺人者が横行する『今昔物語』の世界でもあった。中世の軍記物語の実際の主人公は、社会秩序の破れ目からわれがちに蜂起し、「悪党」と呼ばれた人間たちであった。

だが、それらの「悪」の事象の描き方は、文学史上の各時代にあつて決して一様ではない。「悪」

とは何かについての意識にも、時代によってかなりの幅がある。「悪」と江戸文学」という問題設定も、じつは江戸時代特有の「悪」の認識方法について考えることと無縁ではないのである。

たつたいま認識という言葉を使つたけれども、事實は江戸時代のすべての思想は、「悪」を対象に据えた思弁作業に関するかぎり、認識論的に失敗したのではないかというのがわたしの意見である。

江戸時代思想の中心が儒学にあり、それが文学論のレヴェルでは、いわゆる勸善懲惡主義を主張したことはよく知られている。きびしい文芸統制のなかで、この時代の文学者たちが、少くともそれをたてまゑとしてものを書かなければならなかつた事情もよく知られている。このことは二重の意味で、江戸文学における「悪」の形象化に特異な条件を与えていた。まず思想の側からいえば、儒学は原理的に「悪」の存在を措定できない思想である。「悪」はどこまでも「善の欠如」であつて、それ自体に積極的な存在原理を与えられることはない。だから、それにもかかわらず、世界に実在する、いや、むしろ実存する「悪」の問題性は、そっくり文学者の手に引き渡されねばならなかつた。

一方また、江戸時代の小説家や狂言作者たちは、おおむね抽象的思弁が苦手であつた。「悪」に対するすぐれて感覚的で、いわば現象学的な想像力が、探究の武器として活用されたゆえんである。思想の側が失敗した「悪」の認識論は、いまや文学の側からする感覚的造型の方法によつて代行されるのである。思想から強制された勸善懲惡主義は、しばしば、「悪」を作中に、あるいは舞台空間に跳梁させるためのライセンスの観を呈することになる。「悪」の本性追求をめぐる、これは思想言語と文学言語との対決であつた。

だが当然のことながら、江戸時代の文学言語は、「悪」とは何かについての一般的な議論にはわたらない。そのかわりにその感覚的造型を通じて、「悪」に固有の光彩と色調と芳香とをふんだんに提供するのである。「悪」の問題が正面に設定されたというのはおそらくあたらない。それとは別箇の言語伝達の回路を介して、「悪」の問題性をゆたかに感得させてくるのである。

いまわれわれの前には、そうしたかたちでの「悪」の主題学を体现した一連の固有名詞群がある。いわく、謀反人明智光秀。いわく、大盗石川五右衛門。いわく、『東海道四谷怪談』の田宮伊右衛門。黙阿弥白浪物のさまざまな小悪党たち。そして最後に、幕末から明治のはじめにかけて、「悪」とエロスのまじりあう不思議な酩酊を放散させた妖艶な毒婦たちの群像。

これらの大部分が浄瑠璃や歌舞伎の舞台から選抜されてきた「悪」のチャンピオンたちであることは、決して偶然ではない。もっとも直接的な、「悪」なるものの視覚的顕現であり、そのかぎりでもた、「悪」をめぐる抽象思弁の対極に位置するからである。こうした悪人たちが、次々と変貌を重ねつつ登場し、いかに生き替り死に替りするか。江戸時代二百六十年をつらぬく、これは文学的想像力の、あるいは創造力のシンタクスである。そしてこの水路をたどることによってしか、われわれは「悪」の主題学の系譜——思想言語を代行した文学言語の回路による「悪」の問題への接近に立ち会ふことはできないのである。同時にまた、それはなぜ文学が、というよりわれわれ人間自身が、「善」よりも「悪」に関心をひかれるかという永遠の謎をのぞきこむ窓をも開いて見せるにちがいない。

弑逆者の悲劇

——明智光秀の文学的造型

一

本能寺、溝は幾尺なりや。吾大事に就くは今夕に在り。菱粽手に在り、菱を併せて食ふ。四簋の椀、雨天墨の如し。——頼山陽の『日本樂府』にこう詠じられている史上有名な本能寺の変が起きたのは、天正十年（一五八二）六月二日の払暁のことであった。この年三月、甲州の武田勝頼を攻めほろぼして安土に凱旋した織田信長は、かねて部将羽柴秀吉を派遣しておいた毛利征伐の決戦に赴くべく、五月二十九日に京都に入って本能寺に宿していた。同じく信長から西国出兵の命を受け、六月一日の夜居城亀山を出発した明智光秀は、にわかに進路を東に取り、本能寺を急襲して信長を殺す。老阪西に去れば備中道、鞭を揚げて東を指す、天猶ほ早。吾が敵は正に本能寺に在り、と山陽の詠史はあざやかにこの乾坤一擲の決意の瞬間を凝縮している。

ところでその山陽は、『日本政記』卷十六の正親町天皇の論贊の中で、本能寺の変についてまことにユニークな史論を展開する。いわく、「織田右府、不世出の略を以て、二百年合し難きの天下を定

む。事十に六七は成る。而して身弑せられ、業殞つ。誠に惜しむべしと為す。而して明智光秀、一の羈孤の客なるのみ。右府の為に擢拔せられ、食を推してこれを食ひ、衣を推してこれに衣す。封土豊かに足る。何を苦しみて君腹を刺刃するに至れりや。頼襄曰く、嗚呼、光秀無しと雖ども、右府未だ必ずしも禍を免かれざりしならん。」——わたしがいまこの議論がユニークであるといったのは、山陽が文中で一度たりとも道德論的な尺度をもつて光秀の人物と行為を裁断せず、信長が弑逆の運命に遭つたことをかえつて必然の結果とするような口吻を弄しているからである。およそこの明智光秀という存在ほど、正史たると俗書たるとを問わず、江戸時代の歴史叙述の中で主君を弑逆した大罪人、極悪人として、すぐれてモラリツシユな「悪」の烙印をおされた人物はいないだろう。もちろん、そこには歴史家の側から多少の情状酌量論が提出されていなかったわけではない。幕末近くにいわゆる勤皇思想が新しい歴史観を打ち出すまでは、戦国から織豊政権の時代までを徳川家康の天下統一によつてはじめて拾収される殺伐な混乱期と見る風潮がつよい。したがつて信長も秀吉も、家康のような理想的君主ではなく、しよせんは「乱世の姦雄」であつたとされる。新井白石の『読史余論』ですらも、信長は「君臣の義」を知らぬ「凶逆の人」であり、秀吉は「ただ時の運に乗」ただだけの英雄であるにすぎぬという。そしてそのかぎりでは、秀吉と光秀との差異は相対的に縮小せざるをえないだろう。光秀はたしかに極悪の反逆者ではあるが、一方信長の側にも、その手にかかつて殺されても致し方のないところがあつた。「深慮遠謀」に欠け、「忠臣義士」を用いることができなかった。だから光秀は、いわば信長が用いた戦法をもつて信長を倒し、またその同じ戦法をもつて秀吉にたおされたというこ

とになるのである。

『日本政記』における山陽の明智光秀論は、それといささか性質を異にしている。山陽はまず、「右府、臣下を遇するに礼無し。屢々光秀を罵辱す。其の怨みを取る所以なり」という通説を取り上げて、「然らず」とこれを一言のもとに否定する。形式的な「礼」など無視するのは、戦国時代の君臣関係の常であつて、「平世の意」をもつて律することはできない。それならば、光秀反逆の原因はどこにあつたのか。信長が「百戦、四方の故家を鏖滅して、己が功臣を以てこれに代ふ。然れども、其の取り難きを見るが故に、これを与ふるを吝む。而して与へざるべからず。与へざれば則ち、彼我が用を為さず。故に姑くこれを与へ、彼をして我が用を為さしむ。然る後、事に困りてこれを除き、以て前に予ふる所を奪ふ」ということを繰り返してきたことだとされるのである。同じことがいつ光秀の身に起こるかわからなかつた。羽柴秀吉についても同様であつた。だから見よ、本能寺の変の急報に接したとき、秀吉は「甚だしくは驚動せず」立ちどころに軍師を班して光秀を伐ち、あたかも「吾必ず此の事有ることを知る」といわんばかりの態度を示したではないか。

つまりは光秀の逆意が恣意的な除封の危険を察知していたことと表裏一体であつたと説明し、戦国軍政のダイナミズムの論理によつてその反逆を理解しようとする山陽の史論は、それまで江戸時代の歴史思想に付着していた善悪二元論的な価値判断をきれいに洗い落している。そしてまた、徳川幕府によつて普及された朱子学的道德主義の基準から眺められた光秀像をみごとに払拭しているともいえる。山陽にそれが可能であつたのは、歴史の動因を「勢」（諸政治勢力の布置）の力学的拮抗関係に

還元してとらえ、「噫、向に安土氏（信長）をして尽く外藩を芟せず、因りてこれを撫して家臣を衆封し、而してこれを薄小にせしめば、則ち外藩服し易くして海内早く定まらんこと必せり」（『安土議』）と論じているような、状況の具体性を重視する思考がたらぬかれていたからであつた。そして、こうした山陽史学が成立する背景には、道徳の普遍性のみが人間の歴史を律し、ましてやその動向を左右するものではないとする新たな歴史認識、言いかえれば、朱子学の道徳による歴史の一元支配を揺るがせる思想上の世代交替が進行していたのである。山陽が逆臣光秀を養つたのは信長の「少恩」ではなく「多恩」であつたという逆説を駆使して、後の定論の萌芽を示したのはつとに寛政八年（一七九六）、何とまだ十七歳のときであつた。

江戸文学の世界に現われる明智光秀の造型は、こうした歴史の名による断罪の刻印を身に負いながら、道徳論と文学的虚構とを橋渡しする存在として恰好の位置を占めている。通俗史書から読本、さらには浄瑠璃から歌舞伎へと転生してゆく虚構世界の光秀は、いずれは勧善懲惡の原理によつて処断されるにしても、決してたんなる乱臣賊子としてのみは描かれていない。そこにはいわば、弑逆者光秀を、弑逆者の悲劇の主人公としてとらえかえす発想が見出されるのである。それはもちろん光秀逆逆を道徳論的裁断から解放して、情勢の急速な転変のうちに選択を誤つた武将の政治的悲運とこれを把握する歴史的思维の文脈と同一のものではない。歴史的思维が政治的価値判断の相対性の中にかえつて「善」と「惡」とを浮遊させてしまうのに対して、文学的想像力は反逆の行為にはらまれる「惡」の要素に固執する。そしてそこから「惡」そのものに固有する悲劇性を析出してゆくとともに、文学

独自の想像力が活躍しはじめるのである。

二

寛政十一年（一七九九）七月、豊竹座で初演された浄瑠璃『繪本太功記』は、岡田玉山の読本『繪本太閤記』にもとづいて、その中から光秀の信長弑逆事件をメイン・プロットとして脚色した作品である。ちなみに、『繪本太閤記』は寛政九年（一七九七）から享和二年（一八〇二）までにわたって刊行されたが、文化元年（一八〇四）絶板を命じられた。大阪の役このかた豊臣家の遺臣につながる浪人対策に神経質であり、また関ヶ原以来の有力外様大名を仮想敵国としていた徳川幕府にとって、秀吉にあまり大衆的な人気が集まることは好ましいことではなかったのである。

さて、浄瑠璃『繪本太功記』は、光秀の謀反からいわゆる三日天下、山崎の合戦で一敗地にまみれ、敗走の途中で土民の手にかかって殺されるまでの運命を、六月一日から十三日までの十三段にまとめ、別に発端の序段がある。近松柳、同湖水軒、同千葉軒などの作者名をつらねた合作のためもあってか、劇中人物としての光秀の像には性格的な一貫性が乏しい面もなくはない。が、それとても弑逆を実行した光秀が母や妻からも非難を浴び、気弱くも道義的に動揺する心理の変化と見れば納得できるだろう。全篇は光秀反逆の主筋と、秀吉の毛利攻めとがダブル・プロットとして進行するのだが、直接光秀が登場する前後六段を取り出してみると、それなりにみごとにドラマトゥルギーが浮かび上がってくるのである。それはおおむね、発端「安土城」——弑逆の動機の提示、第一段「鉄扇・光秀館」——

決意、第二段「本能寺」——決行、第六段「妙心寺」——悔恨、第十段「尼ヶ崎」——苦悩とそれに続く高揚、第十三段「小栗栖」——失墜、とても図式化できようか。しばしば上演される有名な十段目「尼ヶ崎閑居の段」(俗称「太十」)を間にはさんで、前半と後半それぞれに心理的な上昇線と下降線とがたどられることになるのである。

それにしてもなぜ光秀は、主君を殺害するという大事を思い立つにいたったのか。さきに見た山陽の考えでは、戦国時代の流動的な軍事情勢と主従関係のもとでは、光秀のみならず、柴田勝家にも、羽柴秀吉にさえも信長を仆してこれに取って代ろうとする潜在的な野望はあったのであり、たまたま光秀の場合、軍事情勢というよりもっと微分的な兵力の配置関係が本能寺の信長をまったく無防備な状態におき、光秀はその「機」に乗じただけだということになる。光秀が反逆者と呼ばれるのはその企図が失敗した結果であり、しかもまた江戸時代になってから朱子学的道徳論の押しつけた烙印がさせたことであつた。山陽の史論はつきつめてゆけばそういう論理になつてしまふだろう。そこではだれもが潜在的に謀反人であり、また情勢しだいでは天下人にもなりうるといった状況だったのである。

だが、いまわたしが問うているのはそういうことではない。つまり、史実のいかんが問題であるのではない。実在した明智光秀ならぬ虚構の武智光秀が——周知のように、芝居の『太功記』の世界では、光秀はこの名で登場する。同様に、織田信長、羽柴秀吉はそれぞれ小田春長、真柴久吉である——コミットした反逆の行為がいかに動機づけられ、いかなる成分の「悪」を賦与されているかがわたしの主要な関心事なのだ。『絵本太功記』の光秀は、もともと「智勇兼備の将」でありながら、悪人に